

「パッチャリ山科みつけ隊」に参加して

伊藤 麻佑子（京都橘大学 文学部 3回生）

◆班の人との写真の選別は、残しておきたい写真が多い中、掲載できる写真の数が決まっていたので非常に大変でした。あれこれ悩んで決めた写真にコメントが付き、冊子の状態になったのを見て、1年半めげずに活動してきて良かったなと思っています。

植松 花菜子（京都橘大学 文学部 3回生）

◆「懐かしアルバム暮らし編」どうでしたか？人の一生に例えて作られていますが、実は、そのアイデアの提案者は私なんです（自分で言うのも照れます）。自分の頭の中で「こうしたら、もっとあもしろいのでは…。」ふと 思い浮かんで提案したことが、まさか採用されるなんて思ってもみませんでした。

各務 文歌（京都橘大学院 文化政策学研究科）

◆私はワークショップの議事録作成を主の役割として参加いたしましたが、こういった企画に参加すること自体が初めてで、大変楽しくかつ意義深い活動であったと感じています。何よりこの地域の新旧様々な世代の方々が共通の興味と目的の元に集まり、真剣に「自分たちのまちの今・昔（そして将来の姿）」について考えるというプロセス、それが古写真収集・ヒアリング・報告書編集などのツール（段階）を通して明確になっていったことは、区民自身の力を示したという点でも大きな成果です。ワークショップでの議論が白熱するあまり議事の記録ノートが何頁にも渡り、まとめるのに苦労したことしばしばです。それだけの「思い」の結晶だからこそ、輝くものができるのだとも思います。私自身、このまちが好きになりました。ありがとうございました！

小谷 昌代

◆社会人となり編集の仕事にたずさわり始めた頃、漠然と「いつかは地元の役に立つ何かにつなげたらなあ」と抱いていた夢。まずはその夢が実現したこととても嬉しく思います。皆さんと一緒に山科のために一生懸命になれたこと、素敵で1年半でした。さまざまな媒体を編集してきましたが、自分がこれまで培ってきたものが、生まれ育った山科の町のためにわずかですが貢献できている、それはこれまで得ることのなかった充実感です。今回のこの冊子は「山科パッチャリ見つけ隊」の隊員一人ひとりが熱心に取り組み、毎回遅い時間まで活動に参加して作り上げた一冊です。きっとこの「あとがき」を走り読みするだけでも山科が好きになる。そんな本に仕上がっています。各ページには、皆が足で確かめ、人にふれて山科の温かさを体感してきた成果が満載！「力作」だと感じています。

説田 三保

◆参加して1年、先輩方のあゆみや想いを伺いながら、懐かしかったり、変貌に驚いたり。「母校」や「ふるさと」を次の世代に伝えることの大切さを感じました。これを機会に聞き取りを始めたいと思っています。

高嶋 千佳（京都橘大学 文学部 卒業生）

◆今ではもう写真に納めることができない風景や、昔と変わらない風景がある場所などをパッチャリ隊の皆さんと山科を走り廻り探したことは、いい思い出です。山科を語る上で沢山の写真が集まりありがとうございました。

高橋 八郎

◆「山科が好きだ」ありったけの声で叫びたい。この写真集の編集にたずさわってそう感じました。知ることは愛することにつながりました。そして今見てくださっているあなたも同じ気持ちになってくださいればうれしいです。

谷 恵香（京都橘大学 文学部 3回生）

◆勉強以外に何かやりたいと探していた矢先に、このプロジェクトを知り応募しました。最初はついていくのが精一杯で手探り状態でしたが、だんだんメンバーの方とも打ち解けてきて活動にも積極的に参加でき、山科の町並みや店を注意深く観察するほど山科好きの人間になっていました。中でも夏休みに行った取材は本当に有意義で就職活動にも影響を与えました。この冊子で一人でも多くの方に山科の魅力を知っていただき、好きになっていただいたら本当に嬉しいと思います。

谷口 明

◆現在の山科を撮影するため、将军塚に登り花山天文台へ行きました。山科の町は笹の葉が擦（す）れ、小鳥たちも鳴（さえず）っていて、町へ下ると流水の音や川には糸蜻蛉（いととんぼ）が飛んでいます。土手にはタンボポ、螢（ほたる）も灯りをともします。また、静かに音羽山より白い満月がのぼります。撮影の際、牛尾の觀音様に立ち寄り「このまま、このまま、いつまでも永久に」と念じました。山科は良い町です。住みたい町と思いませんか。

土山 年雄

◆「偶然撮った写真が今では貴重に」。「普通の風景写真が実は歴史を感じる貴重な写真」。「小さな写真も拡大すると撮影当時、またはその瞬間の時代風景などを発見」。「写真に写っている建物や自然環境などから、今まで知らなかった事実を発見」。等々、1枚1枚の写真に隠された撮影者の意向やその写真が語りかけているものについて、今回のワークショップを通じ、特に感じました。約1年間にわたり苦労を共にしてきた人々との交流に感謝するとともに、この写真集は長く後世に生き続けていくと思います。

中内 智映子（京都橘大学 文化政策学部 4回生）

◆私がこのプロジェクトに参加したのは短い期間でしたが、山科という町の発展に驚きました。山科は大学生活の拠点として過ごしていますが、自分が住んでいる町の歴史を辿ることは価値のある体験だと思います。

中村 幸代

◆山科区役所30周年の記念に計画された写真による「昔の山科」、「今の山科」を記録するという企画はとても有意義だと思い、参加させていただけたことをとても嬉しく思っています。私はインタビューの係をさせていただきましたが、どなたのお話も深く感動し胸が熱くなる思いがしました。皆さんが激動の昭和を必死に一生懸命生きてこられたこと、そしてその上に今の平和な平成の世が有るのだということを若い方にも知ってほしいと思いました。写真での記録という企画でしたので、インタビューのお話を充分生かせなかつことは残念に思います、また次の機会に生かしてもらいたいと思います。山科がよりよい町へと発展していく為に。

西沢 五郎

◆「写真で語る山科の今・昔」のことを市民しんぶんで見て、写真のことであ手伝いできないかと思い、軽い気持ちで参加してみました。ワークショップでは、第2次世界大戦の戦前・戦中・戦後を山科に生まれ育った私の人生を思い起こさせていただき、楽しい日々を送らせていただきました。また写真はその時代の生活や文化の記憶や、社会の変遷の貴重な記録など、語り継がれて行く手段の一つとして貴重な要素を持っていることに気がつきました。昔の写真は人物を中心に人生の記録を主な撮影に用いられ、だんだんと文化や芸術の分野まで活用されています。このワークショップに参加させていただき、昔の写真の撮影場所を探すのに苦労しました。また、家が立ち並んで同じ場所で撮影することができない所もありました。今昔の写真の合わない部分は、撮影困難な場所と見てください。色々と広い範囲で写真について考え直すことができました。

藤田 真砂美（京都橘大学 文化政策学部 3回生）

◆高度経済成長する以前というのはまだ人々が皆貧しい時代で、しかしそれ以上に心豊かな時代だったのだと思います。人と人のつながり、自然の豊かさ、そして歴史的遺物、物がなくとも幸せな生活を送る人々がこの山科にいたことが、古い写真を通じて私に伝わってきました。この写真を見て、古き良き時代を懐かしむだけではなく、今の山科の発展が長い年月の歴史の積み重ねであることを認識し、街の財産が何かを気付いてもらえたらと思います。そして未来に受けつがれるよう守っていってほしいです。

古川 尚美（京都橘大学 文化政策学部 4回生）

◆写真ワークショップに参加し、一枚の写真から人々の生活や時代背景、まちの様子など沢山のことを読み取ることができますと知りました。写真を通じ多くの方に「今」と「昔」の山科の魅力を感じていただきたいと思います。

松尾 桂三

◆自称足輕の私です。山科在住40年、仕事に遊びに飛び廻った記憶が古い写真の場所特定に役に立てたようです。激変した街並、古い写真そのままに変わらぬ處、驚きと感動の日々でした。こんな楽しい機会を与えてください感動しております。

松田 栄津子

◆写真の中に時代や人々の暮らし、思いを見ることができますが、これらをまとめる作業は大変難しく、時間もたくさん費やしました。より多くの方に活用していただきたいです。